

回各県・市の持ち回りで開催されている。山口県文書館を会場として第一回会議が開催されたのは1991年である。最初は中国地区各館の連絡会議としてスタートしたが、1997年度からは四国地区の各館も参加。公文書館の設置を目指している、もしくは同様の機能を果たしている県・市の各機関にも参加を呼びかけて今日にいたっている。

本稿は、この中国・四国地区文書館等連絡会議のここ数年間の活動の概要を紹介するものである。

ここ数年間の連絡会議について

例年、この連絡会議は各館が日々の業務を遂行していく上で直面している課題を議題として事前に提出し、これに対して参加者による「率直な、情報と意見の交換が行われている。試みに、ここ数年間に提出された主な議題を見てみると次の通りとなる。

- ①「公文書収集選別の基準」「永年保存文書の取り扱い」「電子文書化への対応」といった資料収集に関わる諸課題。
- ②「収蔵スペースの確保」「防虫対策や資料の劣化対策」といった資料保存に関する諸課題。
- ③「資料の閲覧制限」「公文書の閲覧利用状況」「レファレンス対応にかかる職員の負担」「若年層を利用者としていかに取り組むか」といった対利用者に関わる諸課題。
- ④「ボランティア制度の活用」「休館日の設定」「臨時職員の任用状況」といった館の運営に関わる諸問題。
- ⑤「公文書管理法施行後の各県の取組」「各県における条例制定の動き」といった諸課題。
- ⑥「災害時の対応」「各地域の史料ネットの活動状況と館との関わり」「資料の所在調査」といった災害時対応に関わる諸問題。
- ⑦「公文書館制度をいかに普及させるか」「条例で公文書館を設置することのメリットは」といった制度そのものに関わる諸課題などとなっている。

中国・四国地区文書館等 職員連絡会議の取り組み

はじめに

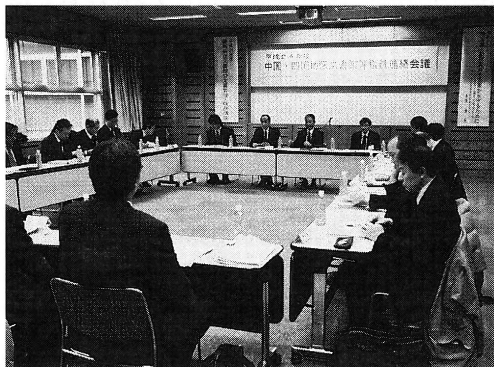
中国・四国地区文書館等職員連絡会議は中国・四国地区にある公文書館・文書館職員の交流と情報交換を主たる目的として、毎年一

これらは中国・四国地区のみならず、ほとんどの地方の公文書館・文書館が抱えている問題であろう。これらの諸課題について、中国・四国地区の関係者による一定の情報の共有を行ってきたのが、この連絡会議の大きな成果なのではないだろうか。

この協議会とあわせて研修会や施設見学会が毎年実施されている。ここでも「公文書管理新時代に向けた取組」(2010年度)や、「大規模災害からいかに資料を救い守るか」(2011年度・2012年度)といった、各館が今直面している諸課題も研修のテーマとして選ばれている。これらの研修会は、その年に館が主催する講習会などとタイアップする場合も多く、こちらも一定の成果を上げている。

アーカイブズウィーク

この中国・四国地区文書館等職員連絡会議が生み出した成果の一つが「中国・四国地区アーカイブズ(文書館)ウィーク」である。公文書館法が施行された1988年6月1日を記念して、中国・四国地区の各館は毎年6月1日からの一週間をアーカイブズウィークとして、記録資料の保存と活用の重要性や公文書館・文書館の役割をアピールするためのイベントを集中的に実施している。2005年に徳島市で開催された連絡会議の席で実施が決定して翌年からスタート。今年度(2013年)で8回目を数えている。各館の具体的な取組はそ



会議風景 (2012年度)

れぞれのホームページ等をご参照いただきたいが、それぞれの特色を生かしたイベント作りに知恵を絞っている。

図書館や博物館・美術館にくらべて公文書館・文書館がマイナーな存在であることは否定のしようがない事実である。殊に地方の館の場合、母体となる地方公共団体の財政危機を背景に予算・人員ともギリ貧の状態が続いている。このような状況だからこそ、我々はその存在意義をアピールしなければならない。各館ともにそのための普及行事を展開している。せっかく中国・四国地区のネットワークがあるのだから、これを活用して、足並みをそろえて行事を並べれば一層のアピールとなるはずである。そのような思いで各館は取り組んでいるのではないだろうか。

尚、毎年のアーカイブズウィークの各館の取組や参加人数については、山口県文書館がとりまとめ役となって連絡会議で報告されている。

おわりにかえて

この連絡会議には成文化された規約は無い。事務局もその年度に開催地となる県市の公文書館・文書館から次年度の館へと引き継がれていく。当然のことながら、連絡会議としての刊行物などもない。アーカイブズウィークなどを除けば、目に見える形での成果も余り無い。しかし、中国・四国地区のアーカイブズ関係者間の一定の情報の共有、そして何よりも人的なネットワークを構築し続けてきたことは間違いのない事実である。

公文書管理法の制定が、今ひとつ追い風となりきっていない地方の公文書館・文書館にとって、このようなネットワークを大切に育てていかねばならないのではないだろうか。

これが10年近くにわたってこの連絡会議に参加し続けてきた筆者の思いである。

徳島県立文書館 徳野 隆